

百団大戦についての一視点

毛 敏 修

(訳) 田中哲哉

百団大戦とは、抗日戦争期に、華北の軍民が日本軍と血に塗れながら奮戦した有名な戦いである。当時これは国内外を震撼させ、その影響は非常に大きかった。1959年の蘆山会議、特に60年の軍事委員会拡大会議以後、彭徳懷のいわゆる「誤り」に対する批判にともない、彼の指揮した百団大戦も少なからぬ罪をきせられ批判されてきた。「四人組」横行のときには、この問題は研究を許されぬタブーの一つとされたため、多くの歴史学者はこれを忌避せざるを得ずうやむやのうちにこの重要な戦いを党の歴史から抹殺してしまい、明文の規定は何らなかったにもかかわらず百団大戦については事実上否定されてしまったのである。以下、この百団大戦の評価の問題について浅見を述べてみる。

(1)

百団大戦後今年で41年になるが、その間これに対するいくつかの評価の異なった時期があった。概していえば、一度は肯定され否定された過程を経ているのである。当然、肯定の度合いにしてもそれぞれの時期にそれぞれの提議があったし、否定的結論の場合でもさまざまな段階での程度の差があった。百団大戦についての評価の問題は、だいたい三つの時期に分けて考えることができる。

完全に肯定された時期。これは1940年から42年までの最も評価の高かった時期を指し、このときにはすべての人がこれを認め、何の異論も出されなかった。たとえば朱徳、賀竜等の多くの人々が少なからぬ文章で百団大戦の功績を称揚したため、ひとりとしてそこに何らかの問題点があったと批判するものはなかった。思うに、当時おそらくは

百団大戦の勝利が戦局の膠着状態を打破し、人民の抗日の威勢をあげ敵の中国侵略の氣勢をそいだため、この著名な戦いについては、抗戦の続行という状況下で人民を鼓舞し最後の勝利を獲得するために、その功績が大きくとりあげられ、問題点はおさえられたのであろう。そう考えたほうが理解しやすいし、またそれが抗戦に不利ないかなる影響も与えるはずはなかったからである。

基本的に肯定された時期。1943年から59年の蘆山会議までは、百団大戦の功績は主たるものであったが、いくつかの問題点とその戦果の不足などころがあると考えられていた。百団大戦問題に対する批判は華北工作座談会において始められ、党の第七回代表大会（1945年延安にて開催）においてもこの問題について言及されたが、結論は出されなかった。当時の会における発言、特に陳毅が朱徳総司令にかわって起草した作戦報告によれば、基本的には百団大戦は肯定されている。1959年まではずっとこれと同様の評価がなされており、主として功績があったと肯定され、またある程度の誤りもあったと指摘されているのである。

全面的に否定された時期。1959年の蘆山会議、特に60年の軍事委員会拡大会議以後は百団大戦の誤りを批判するだけで、その功績を論じることは禁じられた。彭徳懷に罪を問うために、60年軍事委員会拡大会議以後、彼の指揮した百団大戦は政治上は投降主義であり、軍事上は冒険主義であり、組織上からは中央に背いて独断で発動されたものとされた⁽¹⁾。またこの戦いは、抗日戦史上日本人に加担して抗戦勢力を消滅させた「罪悪活動」とも言われた。1966年の文革までの間に、林彪、江青は彭徳懷を四川省から北京に出頭させて彼の「

犯罪行為」を自白させたとき、百団大戦を攻撃して「抗戦と見せかけながら実は蒋介石を助け、元勲をよそおいながら実は元凶であった」ときめつけた⁽²⁾。つまり、蘆山会議から北京軍事委拡大会議、特に文化大革命の10年の動乱期までは、彭徳懷のいわゆる誤りは人民内部の矛盾から敵味方の矛盾にすりかえられたものであって、百団大戦に対する評価も肯定から次第に全面的否定へと変わっていったのである。

「四人組」が打倒され、タブーも破られたいま、われわれは歴史的、唯物的、实事求是的に百団大戦の功罪を評価し、歴史の実際にそった正しい結論を引き出さねばならない。

(2)

百団大戦は、敵味方の勢力が伯仲していた段階に行われた大規模な反掃討戦であり、敵後方における遊撃戦としては主動的に行われた反攻撃である。したがって、抗日戦争の歴史上重要な位置を占める。朱徳が述べているように、「百団大戦は我が軍が敵後方において行った大規模な進攻作戦であり、また我が軍・政・民共同で発動した偉大な交通戦および経済戦的総攻撃で、これは華北の戦局に大きな影響を与えた」⁽³⁾ものであった。この戦いは、抗日の時期に積極的影響を及ぼした重要な戦いであり、その勝利は我が党の歴史上重大な意義をもつと考えられる。その歴史的影響を正しく評価するために、以下の4点をあげこれらを分析してみる。

まず、百団大戦の勝利は全国軍民に抗戦の勝利への自信を高めさせ、投降の危険を克服するうえで時局を好転させるという積極的作用を引き起こした。歴史の事実はすでに百団大戦の勝利を証明しており、これは抗日戦史上の大勝利であり、敵に重大な打撃を与えたものであった。この勝利については、党中央が1940年9月10日に発表した時局の趨勢に関する指示の中で、「我が党50万の大

軍（~~第~~四軍を含む）は敵後方において積極的に行動し、特に今度の華北における百団戦役は日本軍に重大な打撃を与え、全国人民に無限の希望をもたらした」⁽⁴⁾と指摘している。解放区の人民はこの勝利に接してひとり残らず手を拍って小躍りし、たとえば、延安の各界は前線の将兵に祝電を發し、「八路軍の百団大戦は、華北の全戦線において主動的に出撃して輝かしい戦果をもたらし」、「全国の士気・人心を奮いたたせ、……中国民族の無上の光栄であり、抗戦の最終的勝利への保証である」とたたえた。この勝利については、国民党の要人、第二戦区司令長官衛立煌も事実を目のあたりに見せつけられて、「百団大戦は敵に致命的打撃を与えたのみならず、友軍を精神的に鼓舞した」と言わざるを得なかった。また、国民党の軍・政界にも驚愕を与えたため、国民党支配区でも一大センセーションを巻き起こし、それに圧倒された蒋介石はやむなく「嘉賞令」を發布した。

要するに、解放区から国民党支配区、すなわち抗戦に積極的な全国軍民から消極的国民党右派、そして我が党の指導下にある報道界から国民党の統制下にある各新聞に至るまで、すべてこの勝利を認め、全国抗日軍民の士気を鼓舞し、投降の逆流の拡散を阻止し、戦局の困難な局面を好転させることなどについてそれぞれに積極的影響を及ぼした。

つぎに、日本帝国主義に重大な打撃を与え、速やかに対中国戦争を解決するという幻想をうち砕いたことで敵の戦略計画を粉碎した、ということができる。百団大戦は、8月20日に始まって12月5日に終わるまで3カ月半の連続的作戦であった。この戦闘は3つの段階に分けられ、その間の大小の戦闘は合わせて1824回に及び、我が軍は少なからぬ代償を払うことになり、多くの優秀な八路軍の戦闘員、政治工作員、模範的共産黨員たちが民族解放事業のために最後の血の一滴まで流した。そして、日本軍・傀儡軍の大軍を壊滅させるため

に増援部隊の投入を必要としたが、それによって国の内外を震撼させる偉大な勝利をかちとることができたのである。当時の統計によれば、死傷者は日本軍2万645人（うち大隊長以上の士官18人）、傀儡軍5155人、捕虜は日本軍281人（うち大隊長山西綏清、中隊長田木・石野、小隊長木島等8人）、傀儡軍1万8407人、壊滅した敵の拠点は2993箇所、大量の武器を鹵獲した。そのうち各種の銃器（歩兵銃、ピストル、重軽機銃等）942挺、鹵獲した各種車輛2280輛、破壊した鉄道474キロメートル（そのうち正太鉄道の被害が最大）、破壊した炭坑5箇所（井陘新坑〔河北省〕の被害が最大）等の戦果であった。同時に、抗日以来日本軍兵士の中で自発的に武器を携えて投降する風潮が高まり、これと前後して47人が投降した。以上のことから、百団大戦は政治的、経済的、軍事的見地から敵に重大な打撃を与えたと考えることができる。これによって、敵は戦略計画を変更し、最終的中国滅亡計画の時期を大幅に遅らせ、敗軍の指揮官一多建俊を更迭して殺人鬼岡村寧次にかえざるをえなかった。この軍事的敗北、経済的損失にともなって、日本帝国主義は共産党、八路軍、新四軍の勢力について過少評価していたことを知り、日本軍首脳部でも対中国認識を改めよという論調が起こった。たとえば、一衆議院議員は雑誌『改造』で、「支那事変を速やかに終結させることは不可能で、……我が方の軍隊で共産党勢力を根絶せしむるには、百年戦争を経て始めて可能である」と語っている⁽⁷⁾。百団大戦は敵の戦略計画を混乱させ、特に日本陸軍に3年のうちに4回もの計画の変更を余儀なくさせ最終的中国滅亡計画を大幅に遅らせた。すなわち、開始より3カ月以内に終結させるという計画は3年に延長され、3年が10年となり、ついには10年を100年と訂正せざるを得なかった。これは、事実上中国を滅亡させることは不可能だと宣言したに等しい。

つぎに、国共両党間の誤解を解いて両党の指導

下にある軍隊の団結を強め、共産党、八路軍の声望を高めて統一戦線中の頑迷派の反共デマを効果的に斥けた。百団大戦の勝利は、われわれと友軍との抗日に対する協調を強化し、国民党の一部の軍隊をして我が軍と歩調と合わせて頑強な敵に対する襲撃を行わせしめ、また友軍の一部をして自ら日本軍に対する攻撃を敢行せしめたが、これらは我が軍の士気を奮いたたせ、敵の氣勢を粉碎するという結果をもたらした。敵に対する積極的な攻撃であった百団大戦は、共産党、八路軍が中華民族生存のためには凶暴な敵や困難な環境を恐れず、国民党軍とはそれまでの対立をやめて同盟を結び互いの誤解を解いて抗戦のために団結したいという願望をもっていたことを説明している。事実、国民党の頑迷派の捏造したさまざまなデマをたびたび斥けている。共産党は「出撃したことがなく」、「摩擦をくりかえすことに専念し」、やむをえぬときには小ぜり合いをくりかえし、そのたびごとに斃す敵の数は十指にも足らぬほどであって、八路軍の延安にある病院には一人の傷兵も入院していないなどと大衆を欺き混乱させていた事実無根のデマを、である。これらのデマによって真実がまさに隠蔽されようとしていたとき、百団大戦の銃声とその燦然たる勝利の戦果は、そのデマで我が党と軍を攻撃しようとしていた人々に痛烈な打撃を与え、その結果国民党は動揺をきたし、事実を目のあたりに見て、共産党は確実に少なからぬ勝利を収めており、百団大戦はその一例であることを承認せざるをえなかった。このため、全国人民の間で共産党の地位は高められ、それにとともに八路軍、新四軍の地位も向上した。このことは統一戦線内部の階級勢力に重大な変化を生じさせ、統一戦線内部の中間勢力をさらに共産党へ傾斜させる結果となった。

最後に、各部隊の戦闘訓練を強化し、その戦闘力を向上させた。百団大戦に至る過程は八路軍の全軍的でしかも困難な訓練の過程であり、100数

個団という大規模な兵力が共同作戦を行い、三つの段階において、積極的に出撃する襲撃戦、敵の掃討に対する遊撃戦、敵の拠点を殲滅する強襲戦、戦線を移動させる進攻戦等を行った。戦いの複雑性は、指揮員の実践における用兵の才能を向上させ、また参戦した軍民に、困難な条件のもとで戦闘の覚悟から革命の意志に至るまでの厳格な訓練を経験させることになった。戦術の運用面からいえば、百団大戦における襲撃戦の成功は、のちの解放戦争のための貴重な経験となった。劉伯承が述べているように、「この戦いは、参戦した軍民自身にとっては苦しい経験であり、戦闘を経験することで各部隊の戦闘力を高めるということにおいて非常に好ましい教育的作用を及ぼした」⁽⁸⁾のである。百団大戦は、根拠地を防衛し部隊を鍛練した点で重要な意義をもつ。

しかし、ものごとにはすべて二面性がある。われわれは百団大戦の重要な意義を肯定してきたが、そこにはやはりいくつかの欠点と誤りがあり、それらがもたらしたある結果をも見なければならぬ。その誤りは軍事指揮系統に集中し、以下の3点にあらわれている。

第一は、日本軍の進攻方向についての観測が誤っていて、発動の時期が多少早すぎたことである。もしあと半年遅ければ、日本軍の兵力はさらに分散し、われわれは各方面において十分に準備できたはずである。彭徳懷はこの戦いの経験と教訓を総括したとき、自らを批判して以下のように述べている。「この問題についての私の誤りは、主として日本軍がどの方面から進攻してくるか正しく判断できなかったことである。もともと、敵は中原への進攻と粵漢鉄道と湘桂鉄道の開通を準備していたため、私は（われわれの情報工作者の報告にもとづいて）敵が西安へ進攻し、西安占領後中央（延安）と西南地区との連絡を遮断することをおそれて（実際にはこの種の考慮は不要であった）、日本ファシズムが粵漢鉄道を開通させるのは太平

洋戦争遂行のための便宜を図るためだということが見抜けなかった。当時、もし敵のその企図を看破してあと半年辛抱していたならば、あるいは敵が長沙、衡陽、桂林占領後にその兵力をさらに分散させるのを待って大規模な襲撃破壊戦を決行していたならば、その結果はさらに大きくまたその意義もさらに重要なものとなったかもしれない。しかし、実際にはこの戦いは時機尚早であった」⁽⁹⁾。

第二には、この襲撃戦における指揮の点で功を求むるに急でありすぎた。百団大戦の第2段階では、敵がすでに準備を終えていたのに対し、我が軍にはまだ強襲用の重火器が不足していたにもかかわらず、同時に2000余の拠点を攻撃しなければならなかったため、現実離れした蛮勇行為にたよらざるをえず、これが著しく我が軍を疲弊させ死傷も多数にのぼった。（不完全な統計ではあるが、この戦役では我が軍の戦死者5000余人、負傷者1万1000余人、行方不明者300余人、中毒者200余人）

第三は、我が軍の攻撃力を早期に暴露してしまったことである。この戦い以後、日本軍は華東、華中から二個師団の兵力を移して華北の根拠地に対する進攻を強め、特に太行山区では敵の三光政策により人民の損害はさらに重大なものとなった。百団大戦は日本の100万近い兵力を華北の戦場に引き寄せることになり、日本人がそれまで抗日根拠地に対して採用していた政治進攻を主として軍事進攻を従とする戦術を変えさせ、華北では重火器をもって「掃討」を反復するという深刻な情況を作りだした。

要するに、百団大戦の最も主要な誤りは軍事面にあったのである。しかし、この戦いを評価するとき、当時われわれが置かれていた環境と負わされていた任務の重さを無視することはできず、また、林彪、「四人組」のように一点の落度のみをあげつらって全面的に否定することは許されるべきではないと私は考える。

(3)

百団大戦に着せられた汚名は、必ず挽回されなければならない。これは、林彪、「四人組」が彭徳懷を迫害し、党の歴史を改竄した一つの例だからである。

百団大戦は、政治的投降主義であったのだろうか。否、そのいくつかの欠点のみをもって、断じて王明の右派投降路線と混同すべきではない。この戦いは1940年に起こされ、抗日戦争中における3年間の最も困難な時期の始まりであって、国際的にはドイツ、イタリアが、速やかに中国を侵略してこれを亡ぼしアジアに覇をとなえ「三雄」によって世界を分割しようとする日本の野望を支持していたときでもあった。アメリカ、イギリスも蒋介石に圧力を加えて投日反共を奨め、中国を犠牲にする新「ミュンヘン協定」を結び、替って日本のソ連進攻を促そうと企んでいた。これは中国をかつてなかったほどの投降の危険に陥らせ、抗戦の最も困難な時期に直面させることになった。党中央は、時局宣言の中で全国人民に、団結を強化して投降に反対し、困難を克服して抗戦を堅持せよと呼びかけた。彭徳懷は、このような状況のもとで局面を開くため、人心を奮い起たせて投降に反対し、蒋介石に抗日を迫って敢然たる革命精神で内外を震撼させた百団大戦を組織していた。この一連の行動は、王明に対する統一戦線を組織し、抗戦勝利の希望をもたらすことで国民党の右派投降路線に打撃を与えることになり、我が党の指導する八路軍、新四軍が抗日の主力であって人民を団結させ抗戦の最後の勝利を勝ちとる中心的支柱であることを示した。万難を排して抗戦を堅持することがどうして政治的投降主義といえるのか。それならば、日本の侵略に胆をつぶして「亡国論」を主張した人々は一体何主義を堅持したことになるのか。百団大戦を政治的投降主義と明言してしまうことは、歴史の歪曲である。

それでは、百団大戦は軍事的冒険主義であったのか。確かにこの戦いは尚早ではあったが、そのように見るべきではない。この戦いは、我が軍の勢力が比較的発展していた状況のもとで行われたため、全国の八路軍、新四軍は50数万、華北の正規軍は40万近くをそれぞれ擁して強固な根拠地を建設し、特に四大根拠地（晋綏、晋察冀、晋冀魯豫、山東）は15地区（北岳、冀中、冀東、平西、太岳、太行山、冀南、冀魯豫、魯南、魯中、濱海、渤海、胶東等）を包括し、党に指導されたこれらの華北の根拠地は敵の喉元につきつけた匕首であった。当時の敵の勢力はなお優勢であったとはいえ、抗戦はすでに戦略的対峙段階に入っていてその兵力は相対的に減少と分散の傾向にあり、このような状況のもとで発動された百団大戦は、我が軍の実力を計算し敵の兵力を分析したうえでの敵に対する痛烈な一撃であった。この戦いでは100数個団を動員し、数百キロの戦線にわたって同時に敵を攻撃したが、これは抗戦以来われわれの対日作戦としては最初のものであった。この戦いの作戦自体およびその実践は、我が軍の主動的進攻に対する兵力、計画性および準備が十分であったことを示している。そして、この戦いは我が軍の勝利と敵の敗北をもって終った。それは勝算のない軍事的冒険であったわけではなく、したがって、盲動的冒険主義であったと決めつけることはできない。

百団大戦は、中央に背いて独断で発動されたものであったのか。当然これも事実とは違う。では、林彪はなぜこの問題についてわざわざ論及したのか。彼は、百団大戦に対する中央の正式な評価を待たずにその組織上の誤った方法を取りあげ、誇大に宣伝して全面的批判を行ったのである。

朱徳が署名した彭徳懷と左権の軍事委員会への報告と一二〇師、一二九師および晋察冀軍区に対する予備命令（1940年7月22日）は、手続上有効なものであった。それが戦闘に備えよという命令

であったため、下級には戦闘に必要な準備工作をすべて完了せよという命令として伝わって単なる予備命令としては受け取られず、ただちにそれに呼応してしまうという現象をひきおこしてしまった。朱、彭、左は断固として戦端を開くべきだという意見であったが、中央にはその可否を打診し、もし中央が同意しなかったならば、完全に中止させることができたし、それによる何らかの影響が生じることもなかったはずである。そして、7月22日から30日を経た8月20日に至ってこの戦いは発動され、中央はこれに対する態度を表明せねばならなくなった。いかなる原因かはわからないが、認可もされず反対もされなかったことは、上級組織のこの問題に対する処理に不備な点があったと見ることができる。しかし、組織上の責任とはいえ、百団大戦は中央の指示を待たずに発動されたものである以上、組織の観念からは許されざる誤りであった。ただし、その発動の前に中央への報告があったからには、中央に背いて独断でなされたものだとは断定することはできない。中央に報告するのとししないのとでは、その問題の質が全くちがってくる。前者はすべての党員が遵守しなければならない鉄則であり、後者は中央を無視する分裂主義の誤りである。中央の最終的認可を待たずに行動したことと中央に対して全然報告しなかったこととはいずれも誤りではあるが、その程度と性質には差があって一概には言えず、すべて中央に背いたとしてしまうのは正しくない。この二つの状況を明確に区別するためには、表面化した問題の原点と事後の中央の態度からこの問題の性質を見なければならぬ。百団大戦は日本を攻撃するために発動されたものであり、根本的には中央に背く必要などなかった。しかしその開始の時点において中央からの返電を待たずに発動したことは、組織観念に乏しく規律遵守が充分でなかったということであって、意図的に中央に背いたのではなかった。事後の中央の態度はこれを支持し、

反対するものではなかった。彭徳懷は継続的に中央の指示を要求しており、独立王国を建てて中央の正しい意見に耳をかさなかったわけではない。たとえば、百団大戦開始後11日目に、彭徳懷は命令下達と同時に中央に対して情況報告と戦果をさらに拡大する意見を提出した。電報の原文を以下にあげる。

『現在戦果拡大継続中』

(40年8月31日)

賀、関、榮臻、劉、鄧同志とともに毛、朱、王に報告。

今次の百団戦役の勝利は敵の重大な弱点、すなわち、配備兵力の不足により華北戦線の兵力は乏しく、また抽出された兵力も少なくないことを暴露した。そこで、われわれは以下の問題、すなわち、正太鉄道と全蒲鉄道の忻県、朔線段を徹底的に破壊することにより華北の戦局にある程度の変化をもたらすことができると考える。この件についての指示を請うと同時に、戦果拡大継続の準備を進めていただきたい。

彭徳懷

31日⁽¹⁰⁾

中央がこの電文を受けとってから10日後、戦役の開始からは21日後に、中央書記局は返電を発した。原文は以下の通り。

『軍事行動に関する中共中央の指示』

甲、中央は七七宣言および七一決定により当面八路軍、新四軍の全勢力の団結を強化し、つとめて敵を攻撃することに意を注ぐべきだと決定した。華北の百団大戦役に照らして、まず山東および華中においては大規模な計画的進攻行動を組織し、華北においては百団戦役行動をさらに拡大して、打撃を受けていない敵方面に進出し占領区の縮小、根拠地の拡大、封鎖線の打破、戦闘力の強化につとめ、同時に山東、華北方面において我が軍の兵力を継続的に増強し、200万の友軍と国民党後方および敵占領区の千

万の人民に好ましい影響を与え、敵の重慶等に対する進攻計画を遅延させなければならない。

乙、……。敵への攻撃は当面の軍事行動の総方針である。

丙、……

丁、すべての大規模な行動については、計画性を持たせて準備を整えるべきであり、軽率妄動して勝利を逸し失敗を招くことがあってはならない。

中央書記局

1940年9月11日⁽¹⁾

この書記局の指示は、発動後の百団大戦の功績を十分に評価したものである。さらに、別の地区においても類似の作戦行動をとることも要求している。これは、中央が実践の中から百団大戦とその戦果の拡大を必要だと認め、同時に別の地区においても華北に倣うよう呼びかけたことを示したものである。百団大戦開始後の中央の態度から、中央は百団大戦の行動を肯定し、早過ぎるという理由でこれを否定したことはなかったと考えてよい。

百団大戦終結後、中央はその成功を戦略的に利用して国民党右派の反共的陰謀を粉碎し、蒋介石に迫って抗戦を堅持させるために、対外的にはその終結を宣言せず、同時に戦功の発表を行って中央および毛沢東の百団大戦に対する態度はこれを肯定するものであり、否定するものではないことを再度表明した。電報の原文は以下にあげる。

『百団大戦はいまだ終結せず』

1940年12月12日

徳懷同志

百団大戦は対外的にその終結を宣言する必要はなく、蒋介石による新たな反共の高まりに際し、われわれは百団大戦の名声を利用してこれに反対しなければならない。

同時に、毛沢東も電報で

百団大戦は実際に人心を奮いたたせたが、こ

のような戦役を再び組織できるかどうかかわからない。

毛、朱、王 22日⁽¹²⁾

とその功績を称えた。

以上のことから、発動された百団大戦について中央は十分にこれを肯定し、否定はしておらず、かりにその開始時点において中央の態度表明がなかったことについては考察の余地があるとしても、その勝利は中央をしてこの戦いに同意せしめただけでなく、これを標榜して戦果の拡大を図らしめたと見ることができる。すなわち、中央が百団大戦に対しては唯物主義的態度をとり、一点の誤りのみをとらえて結果を見なかったのではなく、実際の出発点から、百団大戦における早過ぎた誤りを中央に対する違背行為とは受けとらなかったばかりでなく、その戦功の評価をもその誤りによって左右するようなことをしなかったのは、この戦役の功績とその影響を十分に肯定していたのである。百団大戦の一つの誤りを誇大に宣伝して中央への違背行為だとする見方は不当であり、中央の百団大戦についての受けとめ方とははっきりと一線を画している。

要するに、林彪、「四人組」が百団大戦を否定し彭徳懷を無実の罪に陥れたが、すでに歴史事実によって反駁された。われわれは实事求是的に百団大戦を評価し、彭徳懷が述べているように「当時の戦役の勝利は実際には損失に比べ得るところは大であった」という百団大戦のしかるべき地位を抗日戦争史上に与えてやらなければならない。百団大戦の功は罪に勝り、その成果は欠点を補って余りある著名な戦いであって、必ず肯定されなければならない。英雄と烈士の血と汗でつづられたこの歴史は、永遠に人の目を奪う燦然たる輝きを放つことであろう。

〔注〕

(1)『中共党史專題報告彙編』125頁。

(2)『中国青年』1980年第12期4～5頁。

(24頁へつづく)